様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２２０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１７２６５

研究課題名（和文）自閉スペクトラム症者の社会性と身体性

研究課題名（英文）Social and bodily aspects in autism spectrum disorder

研究代表者
浅田　晃佑（Asada, Kosuke）

白鴎大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０７１１７０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究計画では、自閉スペクトラムがある人について、社会性と身体性の領域にどのような特性があるのかを検討した。従来違いがあるとされてきた社会性の領域の中にも、ある発達の段階では、自閉スペクトラムがある人と定型発達の人の間で特性に差が見られない場合があることが示唆された。一方で、ボディイメージのような身体性の領域の中に、自閉スペクトラムがある人の特性が存在する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究計画では、自閉スペクトラムの特性概念に新たな見方を加えることができたと考える。これまで考えられてきた社会性の側面においてだけでなく、ボディイメージのような身体性の側面も含めて、自閉スペクトラムの特性概念を再構築する必要性が示された。今後の更なる研究が必要ではあるが、これまでの社会性に特化した療育プログラムだけでなく、身体性を考慮に入れた療育プログラムの有効性も検討していく意義が示された。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we studied social and bodily aspects in autism spectrum disorder. While previous studies reported that there have been differences in sociability between people with autism spectrum disorder and typically developing people, the present studies suggest that there are few differences between the groups at certain age in some social skills. Also, the present studies suggest that there are unique characteristics of people with autism spectrum disorder in the bodily aspects such as body image.

研究分野：発達障害に関する発達心理学

キーワード：自閉スペクトラム　社会性　身体性　ボディイメージ

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

自閉スペクトラム症は、社会性・コミュニケーションの困難、パターン化された行動を繰り返すなどの行動上の問題を伴う発達障害である。例えば、自閉スペクトラムがある人が困難を感じている領域として、他者理解、文脈に応じて言葉を適切に使う言語能力（語用能力）、他者の表情や視線の意味の理解、などの社会性の領域があると論じられてきた。

一方で、自閉スペクトラムがある人が書いた手記からは、定型発達の人ではあまり見られないと考えられる特有の身体性を持つ人がいることがうかがえる。このような自閉スペクトラムがある人の身体性の問題に関する実証研究は少ない。

２．研究の目的

自閉スペクトラムがある人の社会性とそれと関連する身体性の特徴を明らかにする。例えば、従来研究されてきたようなコミュニケーションなどの社会性の領域に加え、ボディイメージのような自閉スペクトラムがある人の身体性についても検討し、それにより、「社会性」に障害があるとされてきた自閉スペクトラムの特性概念を見直し、身体性を考慮に入れた新たな特性概念を検討することを目的とする。

３．研究の方法

本研究計画で用いた方法は以下の 3 つである。

(1) 身体性（ボディイメージ）に関する研究

ボディイメージについて計測するため、研究参加者に自身の肩幅について推測してもらった。研究参加者にホワイトボードの前に立ってもらい、自分の肩幅を縦線で描くようにお願いした。研究参加者は、一回目は上から下に描き、二回目は下から上に描き、研究者が線分の始点と終点の間の距離をテープメジャーにより測定した。線分の計測後、研究者が実際の肩幅を計測した。（線分の長さ÷参加者の実際の肩幅）×100 をすることにより、肩幅の大きさのイメージを測定した。値が 100 を越えると自身の肩幅を過大評価していることになり、100 を下回ると自身の肩幅を過小評価していることになる。

(2) 身体性（パーソナルスペース）に関する研究

以前行ったパーソナルスペースの研究を拡大し、自閉スペクトラムがある人のパーソナルスペースの特徴が特定の時間が経過しても維持されるのかを検討するため、過去の研究から 3 年の時間をおいた縦断研究を行った。

研究参加者は、研究者から 6m 離れて立った。研究者は研究参加者に近付き、「これ以上近付かれるといやだな」と思う地点を研究参加者に伝えてもらった。その地点での研究参加者と研究者との対人距離を測定し、それをパーソナルスペースの指標とした。両者のアイコンタクトがある条件とない条件を 3 回ずつ行った。結果を、今回の研究と 3 年前の研究とで比較した。

(3) 社会性に関する研究

社会性に関しては、2 つの研究を行った。1 つは、会話のルール違反への反応を検討した。会話の際に守るべきルールから逸脱していることに気付くことは（例：質問と関係のないことを話し出す）、会話をスムーズに進める上で非常に重要である。子どもが興味を持てるようにパペットの映像を用いて研究を行った。質問者のパペットに回答者のパペットがおかしな回答をする問題として、関連性（話題と関連したことを答えているか）・質（真実を答えているか）・量 1（伝える情報量は少なすぎないか）・量 2（伝える情報量は多すぎないか）・ポライトネス（丁寧な表現で伝えられているか）の 5 種類を用意した。また、質問者のパペットに回答者のパペットが正しい回答をする統制問題も用意した。研究参加者は映像を見た後、どの程度回答者のパペットの回答がおかしいか評定してもらった。

もう 1 つは、他者の行為に対する説明への評価を検討した。絵本のようにストーリーを絵と文字で提示し、研究者が読み上げた。どのストーリーも登場人物が良いまたは悪いことをして、そのことについて人前もしくは 1 対 1 で聞かれて、最後に本当または嘘のことを答えるという流れであった。ストーリーは、登場人物の発言が人が大勢いる前で行われたかどうか、良い行いかどうか、発言は本当だったか嘘だったかで異なり、様々なストーリーを用意した。研究参加者は、登場人物の最後の発言が本当か嘘か（本当・嘘判断）、良い発言であったかどうか（発言の善悪判断）を答えた。研究参加者は、本当・嘘判断は「ほんとう・うそ・どちらでもない」から、発言の善悪判断は「とてもとてもわるい・とてもわるい・わるい・よくもわるくもない・よい・とてもよい・とてもとてもよい」から回答を選択した。

４．研究成果

(1) 身体性（ボディイメージ）に関する研究

結果は、線分を上から下に描いた一回目において、両グループの結果に差が見られた。定型発達の人はほぼ正確な肩幅の推定を行っているのに対して、自閉スペクトラムの人は自身の肩幅の過小評価を行っていた。線分を下から上に描いた二回目においては、自閉スペクトラムがある人も定型発達の人もほぼ正確な肩幅の推定を行っていた。

この結果を以前行った他のボディイメージ研究の結果と比べてみる。今回のような垂直方向

ではない水平方向において遠い位置から自身の肩幅を推定させる課題（2 つのパーティションを開閉させ、その隙間と自身の肩幅を一致させる課題）では、自閉スペクトラムがある人は定型発達の人と比べて、自身の身体幅の過大評価を行っていた。自閉スペクトラムの度合いとの相関を調べると、身体幅の過大評価を行った以前の課題では、自閉スペクトラムの度合いが高いほど身体幅の過大評価をする傾向にあることが分かった。一方、身体幅の過小評価を行った今回の課題では、自閉スペクトラムの度合いが高いほど身体幅の過小評価をする傾向にあることが分かった。

以上の結果をまとめると、自閉スペクトラムがある人のボディイメージの傾向として、常に過大評価または過小評価しがちであるというよりは、定まったボディイメージが持ちにくく状況に応じて影響を受けやすいのではないかという仮説が導き出された。

(2) 身体性（パーソナルスペース）に関する研究

結果は、前回同様、自閉スペクトラムがある人が、定型発達の人よりも、対人距離が短いことが分かり、その差は時間の経過にかかわらずあまり変わらないことが明らかになった。また、両グループで、アイコンタクトがある時の方がない時よりも対人距離を長く取り、アイコンタクトの有無により対人距離を調整していることが分かった。以上のことにより、両グループのパーソナルスペースの違いという特徴は、時間的に比較的安定してみられる可能性があることが示唆された。

(3) 社会性に関する研究

会話のルール違反への反応に関して、ルール違反への違和感に両グループで差が見られるかどうかを検討したところ、グループ間で差は見られなかった。今回参加した年齢群（平均年齢約 10 歳）では、自閉スペクトラムがある人も定型発達の人も、基本的な会話のルール違反への反応はできている可能性が示唆された。

他者の行為に対する説明への評価に関して、まず、研究参加者がストーリーを理解しているかどうかを確認するため、本当・嘘判断の正答率を求めたところ、ほぼ 100%に近い正答率が得られ、両グループ共に高い内容理解が確認された。次に、発言の善悪判断について検討したところ、悪い行いをした後本当の発言をした場合の判断にグループ間で差が見られ、定型発達の人が自閉スペクトラムがある人よりも良い評価をしていることが分かった。

(4)まとめ

以上のことから、従来検討されてきた社会性の領域の中にも、ある発達の段階では、自閉スペクトラムがある人と定型発達の人の間で差が見られない場合があることが示唆された。一方で、ボディイメージのような身体性の領域の中に、自閉スペクトラムがある人の特性が存在する可能性が示唆された。今後は、どのような場合でそのような特性が見られやすいのか、また、結果が他の身体部位でも追認できるのかなどの検討が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①Asada, K., Tojo, Y., Hakarino, K., Saito, A., Hasegawa, T., & Kumagaya, S. (2018). Brief report: Body image in autism: Evidence from body size estimation. Journal of Autism and Developmental Disorders. 48, 611-618.

②浅田 晃佑. (2017). 発達障害と共感性の新しい見方. 教育と医学, 65, 876-882.

③Asada, K., Tojo, Y., Osanai, H., Saito, A., Hasegawa, T., & Kumagaya, S. (2016). Reduced personal space in individuals with autism spectrum disorder. PLoS ONE, 11(1): e0146306. doi:10.1371/journal.pone.0146306

④浅田 晃佑・熊谷 晋一郎. (2015). 発達障害と共感性―自閉スペクトラム症を中心とした研究動向―. 心理学評論, 58, 379-388.

〔学会発表〕（計 11 件）

①浅田 晃佑・明地 洋典・板倉 昭二・大神田 麻子・森口 佑介・計野 浩一郎・東條 吉邦・長谷川 寿一. (2019).自閉スペクトラム症者による他者の行為に対する説明への評価. 日本発達心理学会第 30 回大会, PS6-31.

②明地 洋典・菊池 由葵子・浅田 晃佑・東條 吉邦・計野 浩一郎・長谷川 寿一. (2019). 自閉症者における文脈的情報性に基づく語の意味の推論. 日本発達心理学会第 30 回大会, PS4-27.

③浅田 晃佑・東條 吉邦・計野 浩一郎・大神田 麻子・森口 佑介・板倉 昭二・長谷川 寿一. (2018). 自閉スペクトラム症児における会話のルール違反への反応. 日本発達心理学会第29回大会, P2-26.

④浅田 晃佑. (2017). 自閉スペクトラム症者の社会性と身体性－パーソナルスペースとボディイメージの検討－. 日本特殊教育学会第 55 回大会自主シンポジウム「特別支援教育における発達障害への実験的接近(4)—自閉症スペクトラム障害児における対人的空間—」.

⑤浅田 晃佑・東條 吉邦・計野 浩一郎・齋藤 慈子・長谷川 寿一・熊谷 晋一郎. 自閉スペク

トラム症者におけるパーソナルスペースの縦断変化. 日本発達心理学会第 28 回大会, P7-35.

⑥Asada, K., Tojo, Y., Hakarino, K., Saito, A., Hasegawa, T., & Kumagaya, S. (2017). Body image in individuals with autism spectrum disorder. Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest, Hungary.

⑦浅田 晃佑・東條 吉邦・計野 浩一郎・齋藤 慈子・長谷川 寿一・熊谷 晋一郎. (2016). 自閉スペクトラム症者のボディイメージの特性. 発達神経科学学会第 5 回大会.

⑧Asada, K. (2016). Understanding violations of Gricean maxims in children with autism spectrum disorder. 31st International Congress of Psychology (ICP 2016).

⑨Asada, K. (2016). Short interpersonal distance in individuals with autism spectrum disorder. 31st International Congress of Psychology (ICP 2016).

⑩浅田 晃佑・東條 吉邦・計野 浩一郎・長谷川 寿一・熊谷 晋一郎. (2016). 自閉スペクトラム症者のボディイメージ：線分課題による検討. 日本発達心理学会第 27 回大会, PE-49.

⑪浅田 晃佑. (2015). 自閉スペクトラム症者のパーソナルスペースとボディイメージ. 第 161 回動物心理学会例会「自閉症スペクトラム障害を通じて考える共感性のメカニズム；動物モデルとヒト研究の接点を探る」.

〔図書〕（計 2 件）

①浅田 晃佑 (2018). 自閉スペクトラムの社会性･コミュニケーション発達の独自性—他の発達障害との比較 藤野博・東條吉邦（編著）発達科学ハンドブック:10 自閉スペクトラムの発達科学 新曜社, pp. 148-156.

②浅田 晃佑 (2018). 障害と支援 開一夫・齋藤慈子（編著）ベーシック発達心理学 東京大学出版会, pp. 223-237.

〔その他〕

ホームページ等

https://researchmap.jp/kosukeasada/

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。